【参考資料】斑点米カメムシ類について

佐賀県農業技術防除センター

１．発生種

・籾を加害し、黒色または茶色の斑点ができた玄米（斑点米）を生ずるカメムシ類を総称して「斑点米カメムシ類」と呼ぶ。

・本県で発生する斑点米カメムシ類はクモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、シラホシカメムシ類、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシ、イネカメムシ等である。

・多くの種が水田周辺の雑草に生息し、出穂期になると水田に侵入し穂を加害する。

斑点米

ホソハリカメムシ成虫

クモヘリカメムシ成虫

（引用：農林水産省 HP）

イネカメムシ成虫

２．形態・生態

（ホソハリカメムシ）

・成虫は体長 10 ㎜程の大型種で、年間の発生世代数は 1～3 世代程度。幼虫は 5 齢を経過して成虫になる。

・成虫の形は長五角形、体色は淡褐色。肩の部分が針のように横にとがっており、先が黒いのが特徴。

・成虫が枯草などの中で越冬し、4 月ころから春に穂をつけるイネ科雑草（スズメノカタビラ、カズノコグサ）などへ移動して吸汁する。春雑草がなくなり、夏に穂をつけるイネ科雑草（メヒシバ、ヒエなど）が出穂するとこれらに移り、繁殖する。早生イネが出穂してくると飛来し、吸汁、繁殖する。

（クモヘリカメムシ）

・成虫は体長 15～20㎜ の大型種で、年間の発生世代数は 1～3 世代程度。幼虫は 5 齢を経過して成虫になる。

・成虫は細長い形をしており、体色は緑色であるが翅は褐色である。

・スギ、ヒノキの林地、樹木枝葉、樹冠等で成虫で越冬する。４～５月に活動を始め、結実の早いイネ科の雑草や飼料作物等で生活し、イネが出穂すると稲穂に集まる。そして籾を吸汁加害するとともに、雌成虫はイネ穂上に産卵し、ふ化した幼虫も籾を加害する。

（イネカメムシ）

・成虫は，体長は 12～13㎜ の大型種で、年間の発生世代数は 1～2 世代程度。幼虫は 5 齢を経過して成虫になる。成虫は、黄白色で、体のへりの部分以外は茶褐色。

・斑点米だけでなく籾が充実しない被害、いわゆる不稔被害を引き起こす。

・他の斑点米カメムシ類と異なり、稲への嗜好性が高い。

・越冬成虫は、暖かくなるとイネ科雑草について生活し、早生イネが穂を出し始める 7 月ころになると水田に移動して、穂から吸汁する。

３．被害

・籾を吸汁して斑点米を発生させる。斑点米が収穫物に混じると，検査等級が落ちるおそれがある。

４．発生しやすい条件

・畦畔や通路に雑草が繁茂している。

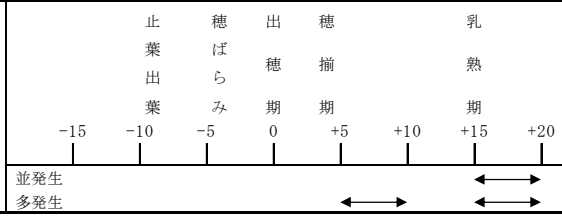
・気温が高く、降水量が少ない

５．防除対策

・圃場周辺の畦畔、休耕田、空き地等の雑草は斑点米カメムシ類の増殖・飛来源となるため、除草作業を出穂 10 日前までに行う。出穂直前以降の除草は水田内へ斑点米カメムシ類を誘い込み被害が大きくなるので、この時期には草刈りを行わない。

・薬剤防除は乳熟期（穂揃い期の約 10 日後）を中心に行うが、発生が多い圃場では穂揃い期と乳熟期（穂揃い期の 7～10 日後）の２回薬剤防除を行う。

・イネカメムシは、他の斑点米カメムシ類と異なり、水稲の出穂始めから籾を吸汁して不稔及び基部斑点米を生じさせる。そのため、出穂前にイネカメムシの発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の防除を行う。

病害虫名	発生予察のための情報		本田における病害虫の防除適期	本田防除の目安 （要防除水準）
	農業技術防除センター※からの予察情報	地区での調査		
カメムシ類	① 県内の発生株率 （雑草地、本田内での20回振りすくい取り虫数） ② 気象条件	① 雑草地、本田内での20回振りすくい取り調査(虫数)		◎ 並発生：穂揃い期～乳熟期の20回振りすくいとり調査で5頭以上。 多発生：山間山麓の早期、早植え水稲で、上記の虫数以上の場合。

６．斑点米の選別

・斑点米の選別には、色彩選別機が用いられている。